

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

平成 26 年 9 月 26 日

所属部局・職	理学研究科、生物科学専攻、霊長類・野生動物系、修士 1 年
氏名	戸田和弥

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
コンゴ民主共和国、ワンバ村
2. 研究課題名 (OCBROの調査、および〇〇での実験)
ボノボ調査
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 24 日 ~ 平成 26 年 9 月 16 日 (85 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
WCBR, 古市剛史教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>6月24日~9月16日の期間、コンゴ民主共和国、ワンバ村にてボノボ調査を行った。今回の調査での目的は、対象となる単位集団の個体識別、予備調査の中で自分の研究テーマをはっきりさせること、また、現地言語”リンガラ語”の学習、フィールドのマネージメントを経験することであった。以下に、目的ごとの調査状況を記す。</p> <p>個体識別</p> <p>E1グループ(オトナオス10頭、オトナメス12頭、コドモ13頭、計35頭)の単位集団を対象に、識別を行った。はじめに、性皮という大きな特徴を持つオトナメスの識別から始め、オトナオス、コドモと識別を進めていった。2か月後には、未熟な部分もあるが、すべての個体の識別可能になった。</p> <p>研究テーマ</p> <p>個体識別、予備観察の中で、コドモの発達に伴う、社会関係の変化に興味を抱いた。</p> <ul style="list-style-type: none">・コドモが、オトナになる過程で、その社会的立場はどのように変化していくのだろうか？ また、それらの変化はどういった段階で生じるのか？・メスの移出のタイミングと初潮との関係。・初潮前後の行動・社会関係の違い。 <p>今後、上記のようなテーマで、研究を行いたい。</p>

リングラ語

はじめは全く話せなかったが、この期間で簡単な会話は行えるようになった。
しかしながら、研究する上でも、住民と交流する上でも、十分ではないので、精進したい。

フィールドマネージメント

ワンバキャンプにおける生活、お金の扱いや道具の管理、村人との交流などについて学んだ

今回の調査で興味深かった出来事を簡単に紹介する。

- ・ 罾にかかったメス個体を、ほかのメス個体が助ける

Puffy という個体が針金の罾にかかった翌日、多くのメス個体が Puffy のそばに集まり、最終的には手の針金についた木の棒を Sala というメス個体が口を使って外した。

- ・ 移籍メスの出身集団との出会い

他集団から移籍してきたメス Puffy が、母親や妹のいる出身集団と出会う。

今回の数日間の出会いの中では、母親との積極的な関わり合いは見られなかったが、出身集団個体とのグルーミングや、交尾行動は観察された。

- ・ 集団間の出会い

4 集団の個体が一度に出会い、空間を共有したことがあった。

- ・ 6 歳のメス、Nadir の移出

以前にも似たようなことがあったらしいので、恐らく一時的なものだとは思いますが、Nadir という個体が、他集団との出会いの期間に、出自集団から姿を消した。

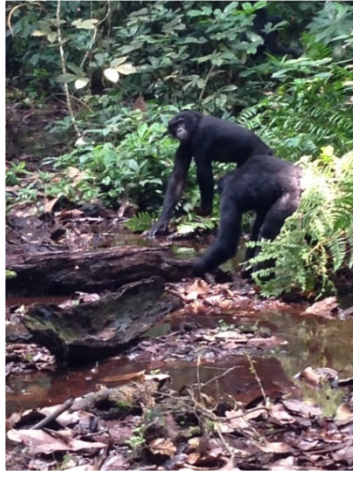


(ワンバ共用データ)

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

・ 浅い川でのヤゴ探し

ボノボが川の中の土をひっくり返し、夢中になって幼虫を探している
あんまり獲れていないようなのに、黙々と泥を掘っていた。



・ リンゴンジ訪問

松浦さん、横塚さんに同行させてもらい、ルオー川付近に位置するリンゴンジという集落を訪問した。人類学者の研究を間近で見ることができた。



感想

この調査期間の中で、フィールドワークの喜びと困難を実体験できたことは、とてもよい経験だった。基地での共同生活の中で、古市先生、社会進化研究室の先輩である柳さん、徳山さん、神戸大学の山本先生から、実に多くのことを教えていただいた。

今回の調査で得た経験をもとに準備し、以降の調査で十分なデータを集積できるよう努めたい。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

謝辞

ワンバで生活を共にし、実に多くのことを教えていただいた、古市先生、徳山さん、柳さん、神戸大学の山本さん、アジア・アフリカ地域研究科の木村先生、山口さん、横塚さん、静岡県立大学の松浦さんに、大変お世話になりました。

また、調査の支援をしていただいた PWS の皆様、研究生活を支えてくださった現地の人々に厚くお礼申し上げます。



集合写真（柳さん撮影）



P グループのトラッカー(柳さん撮影)



E グループのトラッカー（柳さん 撮影）

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

6. その他（特記事項など）

今回、コンゴ民主共和国の同州でエボラ出血熱が発生したため、予定を12日短縮して帰国したが、予備調査として所期の目的は達成できた。